

第 7 分科会	研修俯瞰図番号 E 4		
テーマ	公開保育① ー就実大学・就実短期大学附属幼稚園ー		
会場	就実大学・就実短期大学附属幼稚園	講師	山根薫子先生 (就実短期大学幼児教育学科 教授)
ねらい	遊びの中は不思議がいっぱい。 テーマ「子ども達が発見できる環境づくりを目指して」のもと、遊びを通して子どもが繰り返し試すことができる環境構成について協議する。		
日程	8:30 岡山駅西口バスセンター 集合 8:45 バスセンター発 9:00～9:20 説明(日程・協議について) 9:20～10:10 保育参観 10:30～12:15 研究協議 12:45 岡山駅西口 着 解散		

#### 【就実大学・就実短期大学 こども園の概要】

平成 24 年度に 3 歳児クラスのみで開園し、平成 26 年度 3 歳児から 5 歳児まで揃った。教育目標のたくましい子・考える子・やさしい子から考えた幼児像は以下の 4 つである。

- (1) 好奇心にあふれ、見たり触れたり感じたりする幼児
- (2) 身近な自然に触れ、遊びに取り入れることができる幼児
- (3) 友達と一緒に見たり試したり考えたりする幼児
- (4) 小動物や植物とのかかわりを通して、生命を大切にする幼児

#### 【主題】「子どもたちが発見できる環境づくりを目指して～遊びの中は不思議がいっぱい～」

#### 【研究主題(主題設定理由)】

幼児の姿から、開園当初は幼児の保育経験や保育時間、家庭生活など育ちの違いから、新しい生活に対する不安や緊張を感じ、落ち着かない様子であった。また、現在の年長児にとっては、初年度より手本となる学年がいなかったり、生活経験や直接体験が個々で違ったりすることから、進んで遊びや活動に取り組みにくく、自信をもって行動することが難しい傾向にあった。一方、保育者は、開園したばかりの園で試行錯誤の毎日であったため、十分な遊びの環境づくりができていなかった。そこで、幼児の育ちを観ながら、一人一人のつぶやきを大切にし、幼児と共に考えて環境をつくりあげていくことにした。そうすることで、幼児が意欲的に遊びや活動に取り組むことにつながるのではないかと考え、本園の研究主題を、『子どもたちが発見できる環境づくりをめざして～遊びの中は不思議がいっぱい～』と設定した。



#### 【研究過程】

- ・ 幼児の視点に立ち、興味や関心を把握し、共に環境を構成すること。
- ・ 試行錯誤を繰り返すことができる環境や遊びを通して発見したこと、感じたことを友達と伝え合う場を工夫すること。
- ・ 身近な小動物や植物の世話をする中で、特性に気付いたり大切に育てたりする体験ができる環境構成を工夫すること。

この 3 点を研究の内容として職員間で共通理解し、取り組んでいくことにした。

## 【研究内容】

個々の幼児の実態を把握し、幼児と共に環境を整えながら遊びを進めていく保育者の姿勢が大切であり、『保育者が幼児の思いを引き出せるような言葉がけができているか』『保育者が言い過ぎてはいないか』など、日々の保育を振り返り、幼児が目を輝かせ主体的に遊ぶことができる環境構成や援助のあり方を研究していく。

○環境構成や援助を工夫する。

- ・ 幼児一人一人が「やってみたい」と思える遊びを見付け、意欲的に取り組めるようになるのではないかな。
- ・ 自分で遊びを考えたり、展開したり友達と共にじっくり遊びに取り組めるようになるのではないかな。
- ・ 身近な自然に親しみをもち、生命や物を大切にできる心が育つようになるのではないかな。

以上の内容を考慮し、幼児の視点に立ち、

興味や関心を把握し、共に環境を構成していくために、自ら選んだ遊びの環境を見直す必要性を感じ、季節を感じられる遊びや発達を考えた環境年間計画を作成する。



## 【研究成果（まとめと今後の課題）】

- ・ 試行錯誤を繰り返すことができる環境や遊びを通して発見したこと、感じたことを友達と伝え合う場を工夫していくなかで、「それはどうしたらできたの?」「〇〇したらこうなったよ。」など幼児同士でお互いの考えや思いを伝え合える場を設けていくことで、幼児は自分とは違う別の遊び方に気付いたり同じ思いで遊びを進めたりすることができるようになり、また、友達の意見を参考にして試しながら遊ぶようになってきた。思いを言葉で伝えることが難しい幼児には、必要に応じて保育者が代弁し、思いを受け止めたり、仲介をしながら遊びの中での発見や工夫したことをクラス共通の話題として取り上げたりすることで、友達とかかわりながらじっくりと遊びに取り組めることが分かった。
- ・ 身近な小動物や植物の世話をする中で特性に気付いたり、大切に育てたりする体験ができる環境構成を工夫するにあたっては、幼児に親しみのある野菜や草花を植えたり、園庭や家庭で捕まえた小動物を身近な場所で育てたりできる環境を整えることを心掛けたことで、幼児が興味や関心をもって世話をしたり観察をしたりする中で変化や生長に気付き、愛着をもって大切にできる気持ちが育ってきた。また、飼育や栽培を通して、幼児が「せんせい。なんで?」や、「どうしてこうなったの?」「こうしてみたいけど、わからない。」など疑問や知りたいことを尋ねて来たときにはすぐに答えを出してしまうと、幼児の気付きにはつながらないため、幼児の言葉を受け止めながら「どうしてかな?」「なんでだと思う?」など、小さな疑問も逃さず受け止めながら声を掛け、幼児と共に考えながら図鑑や絵本で調べるなどの援助をしていくことで、幼児は得た知識（特性や育てるための環境など）を取り入れながら飼育や栽培をすることができるようになってきた。
- ・ 以前は幼児が遊びに入る前に「先生、遊んでもいい?」「使ってもいい?」など保育者に確認する姿が多く見られたため、自分からしたい遊びを見付けてできるように戸外・室内に選んだ遊びの環境を充実させていった。その環境の中で、幼児は保育者に見守られることで心が安定し、保育者や友達と共に遊ぶ楽しさや、遊びそのものの楽しさに気付くことで、自らしたい遊びを見付けて遊ぶことができるようになってきた。

- ・保育者は幼児と共に遊ぶ中で一人一人の姿をしっかりと見たり、思いや考えを聞いたりすることで興味や関心を把握することができ、幼児と共に遊びに必要な物を考え、準備したりイメージしたことを遊びに取り入れたりすることで意欲的に遊ぶことにつながった。これらを通して幼児が自らしたい遊びの楽しさを味わい、意欲的に遊ぶためには、保育者は幼児の思いや考えを取り入れながら、共に遊びの場をつくりあげていくことが大切だということが改めて分かった。
- ・幼児の興味や関心に応じて、保育者は幼児の言動を取り入れながら環境を作り上げていくことを心掛けてきた。保育者も共に遊び、幼児の言葉、動き、表情、しぐさなどを捉えることを意識し、さらには、職員間で共有することで幼児の遊びの広がりや異年齢児とのつながりにもなると改めて感じた。
- ・今後も研究を進めていき、保育者は幼児の心に寄り添う姿勢で、幼児の興味や関心を把握し、遊びの環境を整えていくことで、幼児が遊びを通して物事の不思議さに気付いたり楽しさを味わったりすることができるように一層努めていきたい。

### 【バズセッション】

- ・事前に3歳児・4歳児・5歳児と年齢別にグループに分かれて、コーディネーターの先生より見る視点や付箋の使い方などの説明があり、公開保育に意欲を持って参加でき、後のグループ協議でも参加者全員が自分の意見を出しやすく、コーディネーターの先生の指導のもとしっかり協議ができた。
- ・公開園にとってもバズセッションによるポスター発表を生かして、今後の保育に生かすことができた。



(話し合いの様子)

- ・観点(問い)が事前に明確に出ていたため、保育を見てもらいながら気付いたことを付箋に書いてもらうことができ、全員がそれぞれの意見を出し合いながら話し合いをすることができた。
- ・できあがったポスターを貼ってのポスター発表をすることで、自分が参加したグループだけでなく、他のグループの意見を見たり知ったりすることができて良かった。(写真を撮って帰られる方もいた。)
- ・客観的な意見が聞けてお互い勉強になった。また、タイトルを付けて分類することで、共感合う時間となった。
- ・学年やグループによって話し合いの進み具合が違い、スムーズにできたグループもあれば、質問が多かったり話し合いの内容で意見が出にくい時には話が進まなかったりして、グループによっては時間が足りなく、分類やまとめまでできなかつたところもあった。

(各学年で出た感想、意見のまとめ)

### 3歳

- 子どもの思いを受け止め、次の遊びのステップにつなげているような言葉かけや環境構成がされていた。いろいろな遊びにふれながら自分の好きな遊びを見つけて展開していける雰囲気だった。
- 異年齢間がうまくかかわっていた。(0.1.2歳、年中、年長と)
- 自分のやりたいことを友達や先生と一緒にできるような環境ができていた。待つ保育ができていた。

## 4 歳

○幼児が主体的に考えたり試したり工夫したりして遊べるように、保育者は見通しをもって遊びの計画をし、整えることが大切だと実感した。

○物の環境だけでなく、保育者の言葉かけや幼児の思いに寄り添い、幼児の言葉を待つなどの援助が大切である。

## 5 歳

○子どもたちが自分の遊びたい遊びができる環境が整っていた。

○段ボール迷路を作るまでの流れで子どもたちの気付きが遊びにつながっていると感じた。

○子どもたちが自主的に動いたり考えて行動したりしていた。また、それを先生方が尊重されていたと思う。

### 【講師の話】

- ・就実こども園は創設 3 年目の幼稚園で公開保育は初めてであり、就実の先生も 5 歳児の子どもたちにとっても初めてのことで、試行錯誤で手さぐりであった。就実こども園は各年進行で今年度 5 歳児がで、子どもたちが年上のお兄さんお姉さんの先輩がいない中で過ごしてきたどのような育ちをしてきたのか観てもらいたい機会であった。

それだけ、公開保育は特別のことをしないで、日常生活を観ていただくことにした。

- ・公開保育をご覧になって、ディスカッションを通して、自分自身が感じたこと考えたことを全員の皆さんが、自分の思いを出せているように見られた。

話合いの中でどのようにまとめ、テーマをどのように書いたらいいのかを、先生方がしっかりと考えて主体性をもって取り組んでいた。



- ・幼稚園の教育の基本は「環境を通して行うこと」といろいろなところで何度も聞いたり文章で見たりしたこともあると思うが、その言葉だけでの環境というと、どうしてもなにか飾らないといけないと思いがちである。しかし、今日の公開保育で感じたことは、子どもたちにとっての一番大きな環境は、一緒にくらしている友達や先生方の人的環境こそが一番大きいと思える。
- ・遊びの中には子どもたちの大発見・不思議がいっぱいということですが大発見はとでもたくさんある。その大発見を先生方が「こんなことをするとこんなことになるよ」「こんな風になる」と、よく知っている。でも子どもたちが気付くためには、見守りだまっていなければいけない。研究を進めていく中で「どこまで待てばいいのか」「待ち続けていても発見できなかったらどうすれば」と先生から質問があった。

日常生活の中でいろいろな場があるので、自分自身の中の目で気付いて大発見したという体験が大切であり、知識としては増えにくいかもしれないが、「僕がみつけた」「私がみつけた」という充実感、満足感があって、それが積み重なって子どもたちが自分自身で見る目が育つと考える。そのことがつながっていくので、それでいいのではないかと話をしてきた。

- ・幼児は「今日も楽しかった。また明日もくるからね」の繰り返しがあって、「日常生活の大切さ」を感じ、生きることのすばらしさを体験することが積み重なっていくと感じている。例えばだれだれとトラブルになった。くやしかった。そうするとそれを見ていた周りの子ども達がやってきて大丈夫と声をかけてくれた。友達が来てくれたことがうれしかった。

誰だれのことばがうれしかった。そういうことが、毎日可能なら当たり前のことである。

特別のことでなく当たり前の生活を当たり前のようにずっと繰り返していき人は育っていく。このような経験を大切にしていきたいと思っている。

- ・幼児が目を輝かせながら、主体的にいきいき生活すること。それが、先生方がすべて段取りを



した中で遊ばせよう、となるのではなく、時間はかかるが子どもたち自身が「あんなことをしたい」「こんなことをしたい」と思う気持ちが一番大切であり、子どものその思いをどんな方法で育てていけばいいのかということがすべての先生の課題だと思う。

- 公開保育は終わったが、今日で生活が終わるわけではない。  
また明日から続くので、お話をしていると、あれもしなければいけない、これもしなければいけないと、とても緊張した顔も見られるが、明日からの保育、(参加者の)先生方もぜひ笑顔で子どもと一緒に過ごしてほしい。



《担当園・記入者》

山陽学園短期大学附属幼稚園 加藤泰子